



江藤淳

海は甦える

第五部

海は甦える

第五部

江藤淳

海は甦える 第五部 山本権兵衛と政治
昭和五十八年十二月一日第一刷

定価 一一〇〇円

著者 江藤 淳

発行者 半藤一利

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三

印刷所 精興社

製本所 大口製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

海は甦える

第五部——山本権兵衛と政治

著者自装

正門を突破して議會構内に押し入った群衆の喚声は、すでに議場のなかにも少からぬ影響をあたえていた。

花井卓蔵に替って反対討論に立ったのは、政友会の若武者松田源治だったが、松田が覇氣満々たる演説をはじめて間もなく、議場は再び以前にもまさる喧騒状態に戻って、罵声が随所に飛び交いはじめたからである。

しかし、松田は、若さにものをいわせて、強引に反対演説を続けていた。

「いったい諸君、事件の真相を明らかにもせず……」

と、松田がいいかけると、それをめがけて「明らかだッ！」という野次が飛んだ。松田は憤然として、それに立ち向った。

「事件の真相を明らかにせずして、今日政府を弾劾するとは何事でありますか。議會の会期は、まだ五十日近くを余しているのであります。ドイツにおける裁判の結果の書類を取寄せ、司法処分の

結果により、またその他の審査の結論を俟って堂々と内閣を弾劾しても、まだ充分に余日があるではありませぬか。閉会が兩三日のうちに迫っているのではない。四十有余日がある以上は、慎重に公平に調査して、しかるのちに弾劾するということが、議院当然の権能ではありませぬか」
政友会議席から、このとき盛大な拍手が起った。

「重大なる国際的司法問題を検挙するについては、一カ月や二カ月かかるのは当然である」
と、声援に力を得て松田は駒を進めた。

「……これを怠慢なりと称するのは、すなわち自ら人民の人権を蹂躪せよということを当局に迫るものと私は考える」

「ノウノウ！」と叫ぶ者があり、それをきっかけにして議場は騒然となった。

「当局は、内務司法兩大臣とも各々職責を重んじ、ブーレーを検挙し、ヘルマンを検挙せしめ、事件は堂々と進行いたしておるではありませぬか。これが何の怠慢であるのでありますか」

「寝言をいうなッ！」「黄色い口を塞げッ！」という罵声が、松田の行く手に飛んだ。

「黙ってお聴きなさいッ！」

と、松田はやり返した。

「……しかしして、この論拠を土台として海軍の腐敗ということは全国の輿論であるという。何が輿論であるか！」

「君の耳に聞えざるのみ！」

間髪を入れず、同志会席から矢が放たれた。松田は負けずに応酬した。

「立憲国においては、衆議院の多数によって輿論というものは決せられるものである！」

「なにをいうかッ！」と、同志会の黒須龍太郎が自席に立ち上り、拳を振りまわした。それを合図に議場はたちまち、蜂の巣をつついたような大騒ぎになった。

「諸君！」

松田源治は、混戦のなかに更に馬を進めようとした。

「……日本の国には一般投票というものはない。レフエレンダムがないのである。しからば議員が群衆に支配せられてその意志を左右するということは、暴民政治の端緒を開くことになるではないか。先帝陛下が憲法を發布せられて二十五年、議院政治を創設して二十余年、すでに群衆によって議会が支配せられ、暴民政治の端緒を開くという事態になったならば、日本の憲法政治はいかが相成るのであるか！」

「それは政友会がやったのだッ！」

と、再び黒須龍太郎が大音声を発した。

そのとき、議長大岡育造の声が、議場内に響き渡った。

「黒須龍太郎君に退場を命じますッ！」

その声に応じて、金筋をつけた守衛長がすかさず黒須の議席に駆けつけ、猿臂を伸して黒須の右

腕をむずとつかみ、引摺り出そうとしたまさにその瞬間である。

同志会の神藤才一が、自席から横ッ飛びに傍らの議席を飛び越えて、黒須の右腕をとらえた守衛長の腕を突き退けざま、

「何をするかッ！」

と一喝した。

しかし、守衛長はたちまち神藤の手を振りはなし、その場で神藤を相手に大格闘を開始した。

これを見た守衛の面々が、守衛長の大事と駈けつけて、神藤を引き離し、黒須を退場させようとする、同志会席は一斉に総立ちとなった。

そのなかから躍り出て来たのは、腕に覚えのある荒川五郎、浅羽靖、早川鉄治、坂本金弥、小河源一、小寺謙吉、鈴木寅彦といった同志会員に、国民党の水野正巳を加えた屈強の代議士連中である。彼らが「ウォーッ！」と喚声を上げ、それぞれ鉄腕を揮いながら守衛軍と大立ち廻りをはじめるに及んで、議場はまったく收拾不可能の混乱状態に陥った。

「諸君、静粛に！」

と、大岡議長が制止しようとしたが、

「議長取消セッ！」

という叫び声が上り、議場はさらに騒然とした。

松田源治は壇上に立往生したまま、惘然として無言でこの有様を見下していた。

この間に、議長席には、藤原惟郭、小泉又次郎、武富時敏らの同志会幹部に加えて、中正会の田中善立、高野金重らの野党の面々が駆け上り、大岡議長を取り囲んで、口々に黒須退場の撤回を要求した。

しばらく押し問答が続いたのちに、武富時敏が大きく肯いて、大岡の耳許でなにごとかをささやくと、交渉委員たちは降壇した。

「諸君！」

と、大岡議長は声を励した。

「……私は、あまりに騒擾をなさるればついには退場を命じなければならぬということを、前もって警告いたしましたのであります。いまだかつて警告をしたことはなかったけれども、今日は特に注意して島田三郎君のときより、私は別段に注意をしている次第であります。さて黒須君はしばしばその席を離れて、あの通りの行動をなされたことによって私は先刻退場を命じたのであります。しかしながら名譽ある同志会の総務武富時敏君が来て、以後は静かにさせるということを保証されましたので、しばらく前の命令を取消して以後の静肅を待ちます」

ようやく演説を続けるきっかけをつかんだ松田源治が、

「諸君！」

といいかけると、蔵原惟郭が自席から、

「議事の進行について議長に注意いたしたい。ただひとりこの方面にのみ眼を注がずに公平に……」

と大声を上げたが、大岡はもはや取り合わなかった。

「諸君……」

と、松田は演説を再開した。

「ややもすれば近來浮説流言を根拠といたしまして、あるいは国技館に三万の聴衆が寄ったからこれが輿論である、新聞が筆を揃えて攻撃するから輿論であるというがごとき、安易な言説をなす向きがあります。しかしながら日本のごとき、一般投票の制度のない国においては、議会の多数少数によって輿論の動向を卜する^{ばく}ということが、これ立憲政治家のとるべき常道ではありませんか。一般投票のごときも、数年前憲政の元祖英国においても問題になったが、一時の感情に制せられて慎重審議を欠くという理由で斷乎として排斥されたではありませんか。要するにこの議會なるものが、今日のごときややもすれば民衆を煽動してこれを輿論なり、輿論なりと唱えて、国家の基礎を動搖せしむるにいたっては、吾輩は毅然としてこれに反対して、議院政治の効果を中外に宣揚しなければならぬと考えるのであります」

このとき政友會議席から、拍手が起った。

「……かかる無責任なる決議案は直ちに否決して、議院政治の効果を中外に宣揚せられんことを私は希望するのである」

と、松田は難航した演説を締めくくった。再び政友会席から、敢闘をねぎらう拍手が起った。

このとき、政友会の長晴登が立ち上り、

「議長ッ！」

と呼号した。討論終結動議の提出であった。

肯いてそれを受けながら、大岡議長は、

「山本総理大臣」

と、この日はじめて不信任案を突きつけられた内閣首班の発言を許した。

権兵衛は徐ろに立ち上り、重い足どりを壇上に運んだ。その表情は沈痛そのもので、声調は深く沈み、顔には憔悴の色が濃かった。

「諸君、シーメンス事件発生以来、本会ならびに委員会におきまして、種々質問応答を重ねましたので、すでに諸君におかれては御了知のはずであるにもかかわらず、本日ここにこの決議案の提出を見るにいたりましたるは、はなはだ遺憾に存ずる次第であります」

傷ついた虎の眼は、屈辱にまみれて潤んでいた。虎は咆哮するかわりに、語尾を震わせて語っていた。

「これまでしばしば述べたがごとく、この事件につきましては、政府は司法機関におきまして審理を遂げつつあると同時に、海軍省におきまして査問を進めつつあることは御承知の通りであります

す。いずれもその進捗を待つて、自から明白となるべきの時期あるを確信いたしております。本大臣は大政輔弼の責任を有する者であり、したがってかかる嫌疑に対して輕々しく進退を決すべきものにあらざると信じまするが故に、ここに政府を代表して一言政府の所見を言明いたして置きます」

「ノウノウ！」「厚顔なり無恥なり！」などという野次が飛んだ。しかしその野次は、たちまち与党席からの拍手にかき消されてしまった。

自席に戻った樞兵衛は、かつて経験したことのない鉛のように重い疲労を感じていた。その疲労は、地の底に彼を引き摺り込むようにまとわりつき、いくら氣持を奮い立たせようとしても、どうしても撥ね退けることができない。今までの生涯で、いったいこんなことがあっただろうか？と彼は自問した。いや、苦しかった日露戦争のときですら、こんな目に遭ったことはなかった。

「長君の動議には定規の賛成があると認めます。よって決を採ります。討論終結に賛成の諸君は起立……」

大岡議長の声が聞えていた。

何のためにこんなことをしているのだらうと、樞兵衛は、心の深い部分で訝っていた。

行政財政の整理、陸軍の非立憲的行動の抑制と海軍予算の成立、カリフォルニアの日本移民問題をめぐる日米摩擦の解消、そしてあの渾沌たる支那問題。

それらを解決するためにこそ、彼は進んで政治の世界に乗り出し、聖旨によって宰相の印綬を帯

びたはずではなかったろうか？　そのとき権兵衛が、山県意向を無視したとしても、それがいたい何だろう。彼は陛下の山本であって、山県の山本ではない。そして陛下の山本は、陛下のために、国家と国民のために、過去一年間、誰よりも見事に輔弼の重責を果たして来たはずではないか？　議場がまたまた騒然としていたが、その物音は遠い海鳴りのようにしか権兵衛の耳には聞えなかった。

大岡議長が叫んでいた。

「異議あれば、議長は更にこの異議を決するために記名投票を用います。閉鎖、……更に注意します。更に注意を与えます……」

異議があるぞ、と、権兵衛は心の中で叫んでいた。こんな茶番に、荏苒時を費している場合ではない。もし非違がある者があれば、容赦なくこれを匡ただせばよい。しかし、非違ある者が現れたからといって、ことの本来を顛倒することが許されるはずはない。

海軍では、彼はそうして来たばかりではなく、そうして来ることによって成功しつづけて来た。なぜ政治の世界では、成功してはいけないのだろうか？　その成功は、とりもなおさず国家と国民の成功であるはずなのに。

「投票もれはありませぬか。投票もれはないものと認めます。閉鎖……閉鎖。投票の結果を、書記官長より朗読いたします」

大岡議長の声につづいて、林田衆議院書記官長の声が聞えた。

「出席総員三百六十八。可とする者、二百五。否とする者、百六十三」

議場からは、拍手が起っていた。

「よって討論は終結になりました。直ちに本案の可否を問います。同じく記名投票を用います」と、大岡議長が宣告した。

「閉鎖を待って下さい」

と叫ぶ者があった。

「もう大概に御着席をお願いします」

と、大岡がいった。

「閉鎖は早い」

と叫ぶ者があった。

「御着席をお願いします。閉鎖を命じます。閉鎖……記名投票の方法は、最前と同様ですが、更に念のために申します。弾劾案を可とする者は白票、否とする者は青。氏名点呼」

この事件が発生してから、山本伯爵家は毎日重苦しい雰囲気包まれていた。

登喜子は、なにもいわずに微笑するだけで権兵衛をいたわるようにしていた。彼女は、誤解と罵詈雑言の矢面に立つ夫の姿を、これまでに何度も見て来ていた。そして、それを乗り切って、またしても荒波のなかに乗り出して行く夫の姿を。

「この人はいつも正しい。ただ、力がありすぎるだけなのだ」

と、登喜子は思っていた。

力がありすぎるからこそ、権兵衛はカッターに乗って、品川の廓まで自分を迎えに来てくれるという離れ業をやったのだ。いつだってこの人は、あのときと少しも変わっていない。登喜子は、そう思って日増に憔悴の色の濃くなる夫の健康に、細やかな気を配っていた。

しかし、長男清の嫁の政子は、若いだけについて感情を面に出した。権兵衛は、そのたびに美しく聡明なこの若い嫁に向って、

「おれに疚しいところがなにもないのだから、そんなに心配しなくていいよ」
と、なぐさめの言葉をかけた。

「だって、新聞があまりひどいことを書くんですもの。お父さまがおいたわしくって」
と、まだ女学生気質の抜けない政子は、口惜しくてたまらないというように涙ぐんだ。

「投票もれはありませぬか。投票もれなしと認めます。……閉鎖。投票の結果を書記官長より朗読いたします」

と、大岡議長が宣していた。

「出席総員三百六十九。可とする者、百六十四。否とする者、二百五」

林田書記官長が報告した。

「決議案は否決になりました。本日はこれにて散会します」

と、大岡議長が議事の終了を告げると、盛大な拍手が起った。

時に大正三年（一九一四）二月十日午後三時四十二分。樺兵衛は大臣席に立ち上り、閣僚とともに政友会議席に向って深く首を垂れた。

それから数分も経たぬうちに、外務大臣の牧野伸顯は、総理に相談すべき外交上の案件をかかえて、院内の総理大臣室に入ろうとした。

しかし、牧野外相は、ドアを開けた瞬間に立ち停った。樺兵衛が頭をかかえ、声もなく涙を流していたからである。

「総理が、いや樺兵衛どんが泣いていなさる」

と、牧野はこの光景に激しく胸を衝かれた。

彼はいまだかつて、樺兵衛が涙を流しているのを見たことがなかった。よほど無念なのだろうと、牧野はその胸中を察し、暗然とした。

不信任案は、否決されたのである。それなのに、総理は泣いている。

牧野はそっとドアを閉めて、その場を離れた。あるいは樺兵衛の胸中を知っている者は、彼と一緒に戦って来た日清日露両戦役の戦死者の霊だけでも知れなかった。

「乃木、済まぬことになった。お前が羨しいぞ」

と、樺兵衛は、自分に後事を托して先帝陛下に殉じた乃木希典の霊に、泣きながら呼び掛けているのかも知れなかった。